



「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光をもつ」(ヨハネ福音書8章12節)

「地の塩・世の光」

学園長・牧師 道城献一

新しい年を迎え、新しい一歩をともに歩み出す事ができます幸いを感謝いたします。2012年の新しい年が皆さまお一人おひとりにとって豊かな祝福と実りのある年となりますようお祈り申し上げます。

この新年、まず、わたしたちは、特別な思いをもって東日本大震災被災地の速やかな復興を願い、被災者の方々の生活に希望の光が見えてきますように祈りたいと願います。お互いの居場所は離れていますが、様々な不安と恐れが増幅する被災者の方々の苦しみや痛みを心に寄り添わせ、被災地の方々を置き去りにすることがないように、また忘れ去ることのないようにしましょう。

さて、本年は、学園創立90周年の年です。地域の子どもたちのプレイグラウンドから始められた学園が、90年の歴史の中で、四つの保育園、二つの幼稚園、小学校、中学校、高等学校を持つキリスト教学園として発展し、交通の便もさほどよくないこの小さな田舎の町で90年の長きにわたって存続していることに驚きを禁じ得ません。創立者や先輩たちの播いた労苦の種が様々な困難な道乗り越え、この地で豊かに成長し、志を同じくする者によって継承され、多様な収穫を得ていることに大きな喜びを感じています。

昨年末、入院中の理事長から各校園管理職宛ての手紙が届けられていました。その内容は、学園訓「地の塩・世の光」についてのメッセージでありました。少し紹介をいたします。

「世界中で大変革が起こりつつある今日、日本の混迷と国力の低下には憂慮すべきものがあります。たかが一私学とは申せ、近江兄弟社学園の命運を託された我々は、知力を尽くし、ある限りの勇気をふるって学園を良い方向に引っ張って行かねばなりません。学園訓「地の塩・世に光」は生徒児童のためのモットーではなく、私たち自身に与えられた訓示です。マタイによる福音書では「イエスは群衆を見て山に登られ、弟子たちが近くに寄って来た。そこでイエスは口を開き、『あなたがたは地の塩である。・・・あなたがたは世の光である』と教えられた、と記されており、ルカによる福音書には「聞く耳のある者は聞きなさい」と記されています。すなわち、「地の塩・世の光」という言葉はイエスが弟子に向かって語られた言葉であり、また、「聞く耳のある者」に対して語られた言葉であります。それを我々は学園訓として用いているわけですが、弟子たちが近くに寄って聞いたように、私たち自身の主体性、積極性をもって聴き、実践しなければなりません」と

理事長のメッセージを私たちは一人一人に与えられたメッセージとして受け止め、「地の塩・世の光」となって教育のわざを通して社会を変革する者になろうではありませんか。

昨年の創立記念式において学園創立100周年に向かってグランドデザインが提示されました。100周年まであと10年。しかし、この10年は、これまで以上に私学にとりまして大変厳しい教育環境になることが予測されます。混迷する時代の10年であり、学園の教育にとって「荒れ野の10年」とも言える苦難の時となるかもしれません。しかし、荒れ野の苦難こそが希望につながることを信じて進みたいのです。「苦難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す。そして希望は決して失望に終わらない」ことを信じて進み行きたいのです。今、働いている教職員のうち何人が10年後の100周年記念事業の完成を見届けられるのか、予想はつきま

せん。私個人もそれを見届けたい強い願いはありますが、その時までいのちの保証はありません。ですから、一年一年、いや一日一日、その夢を見ながら、夢の実現に向かって悔いのない奉仕ができればと切に願っています。たとえ、道半ばで天に召されるようなことがありましても、100年の歴史の最終段階において歴史の一端を担う光栄に与らせていただけたことを人生最後の喜びと感謝にして人生を閉じさせていただければ幸いです。

さて、創立100周年記念事業の中心は、教育改革であると理事長は明言されております。混迷した日本社会、混沌とした日本の現状から脱却し未来を切り開くのは、教育の立て直しによると確信しております。

国内では教育を支える環境も大きく変化し、公的助成を受けている私学教育の「独自性と特徴」を堅持しながら公の教育制度やシステムの影響下に埋没しない「価値観」と「主体性」の確立が強く求められている時です。学園の教育の更なる充実と発展を期して学園教育の土台となる宗教教育「いのち」「平和」「環境」教育を柱とした人間教育を貫き、他校にはない独自の「連携教育」に発展をさせる大切な時期を迎えていると認識しています。

学園の建学の精神「イエス・キリストを模範する人間教育」とは、イエス・キリストの生き方に倣う人間教育であり、子どもたち一人ひとりを大切にしている教育です。個々人の個性や才能を管理したり、閉じ込めたりするものではありません。内に秘められている能力を引き出し、人間形成の多様な果実を結ぶことにお仕えする教育です。人がどんどんと壊されてきた経済至上主義や経済的価値最優先の価値観に組み込まれた教育の弊害を打ち破り、人間を経済の歯車の一つにするような教育に断固として「否」と言うことができる教育とならねばなりません。それがイエス・キリストの生きかに学ぶ人間教育なのです。

人間の「内面的価値」を見直すということが、日本の近代教育の緊急課題であります。成長から限界に直面した日本経済状況の中で、教育も根底から改革を迫られている時です。教育の課題は大きく浮き彫りにされています。心の教育を軽んじ、物質的繁栄にこそ人間の幸せや豊かさがあると信じてきた日本の近代教育は、人間の内面の文化や心の耕しを忘れてきた経済至上主義とその価値観に大きく影響を受けた教育です。それは人間本来の宗教心や目に見えない世界への畏敬の心を排除した教育となって時代を築いてきました。ここから日本で古くから伝えられてきた目に見えない世界の内面的価値を尊ぶ精神や文化の衰退と崩壊が始まったのです。そして今その教育の負の遺産が社会のすべての人間の営みに大きくのしかかっているのです。

今、人間の心を再び耕す本来の教育を取り戻して行かねばなりません。教育を通して「人間回復」を実現することが混迷する日本社会に希望をもたらすのであり、教育の大きな使命であります。「教育とは人を創り未来を創る壮大な夢のある働き」です。このメッセージを混迷した社会に伝え、学園の人間教育が未来を切り拓く「希望の教育」であることを力強く証ししようではありませんか。
(2012年1月6日学園総合教職員礼拝メッセージより抜粋)

2010年度学園年間聖句 『隣人を自分のように愛しなさい。』

2010年度学園の祈り

神さま、私をあなたの平和の道具としてお使い下さい。
慰められるよりは、慰めることを、
理解されるよりは、理解することを、
愛されるよりは、愛することを、
私が求めますように。アーメン

—アッシジの聖フランシスコの「平和を求める祈り」より—

「使用済み切手回収運動」と「一日一円献金運動」に あなたのお力添えをお願いします

使用済み切手は「花の日礼拝」「クリスマス」の行事に合わせて年2回の集約をしています。家庭などに届いた郵便物に貼られた切手を一枚でも多く集めて持ってきて下さい。これは「日本キリスト教海外医療協力会」(JOCs)を通して海外の医療活動に使われます。皆様のご協力のお陰でこれまでに60数名の医師、看護師、保健士が海外の国々に派遣され、子どもたちの尊い「いのち」が守られてきました。昨年度は使用済み切手によって2000万円を越える収入となったそうです。



「一日一円献金」は昨年度から全学園あげて宗教教育の実践として取り組んでいます。貧困・飢餓、病気などで死に直面している世界の子どもたちの尊い「いのち」を救うために、あなたの力が必用です。どうぞお小遣いの中から「一日一円」の献金をお願い致します。

2000人を超える学園の園児・児童・生徒・教職員が「一日一円」の協力をして下されば、一日2千円、一カ月6万円、一年で72万円にもなるのです。これを保護者さま、それから同窓会の皆さまに協力をお願いして、この運動の輪を広げて行きたいのです。学園関係者ばかりではなく、地域社会の多くの人々に情報発信をして、協力をえることができれば、世界の子どもたちを飢えや貧困、病気から救う確かな一助となると信じております。ヴォーリズ先生が常に説かれた「協力」の言葉の意味を踏まえた働きになると確信しております。即ち、イエス・キリストの十字架の愛の教えの下に私たちが力を合わせると、その力がどんなに小さくても、神様の大きな力が働いて大きな働きができるという意味です。

献金箱は二基設置されています。本館5階「ヴォーリズ平和礼拝堂」前（ヴォーリズ胸像の横）に一基、本館1階ロビーに一基です。



「一日一円献金」に多くの人々が協力をしてくださっています。感謝いたします。暗い世の中を照らす「一本のろうそくの灯」のように、灯の輪を学園全体に、また地域社会にも広めて行きたいと願っています。

このたび、学園宗教センターでは「一日一円献金」のシールを準備いたしました。学園の全教職員、園児、児童、生徒のために用意いたしました。このシールを空き瓶や空き缶などに貼っていただき、各自のお手元で小銭を貯めてください。一杯になれば左上の写真の献金箱（ロビー、礼拝堂に設置）に入れていただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

皆様のご理解とご支援をお願いいたします。